

# 民主島根

2016年  
**1.3**  
第1253号

発行所 松江市袖師町3-6 TEL 0852-24-2444  
日本共産党島根県委員会 FAX 0852-24-6369

## 今年も参議院選挙(7月)の年 春名なおあきを必ず国会へ 戦争法廃止へ国民連合政府の扉を開けよう

今年も参議院選挙の年です。一昨年末の衆議院選挙での大平喜信衆議院議員の誕生に続いて、今度は春名なおあきさんを必ず国会へ送りましょう。参議院選挙は「国民連合政府」の実現にとって重要なたたかいです。憲法違反の戦争法を強行した自民、公明両党に審判を下し、参議院で自民党、公明党を少数派に転落させましょう。



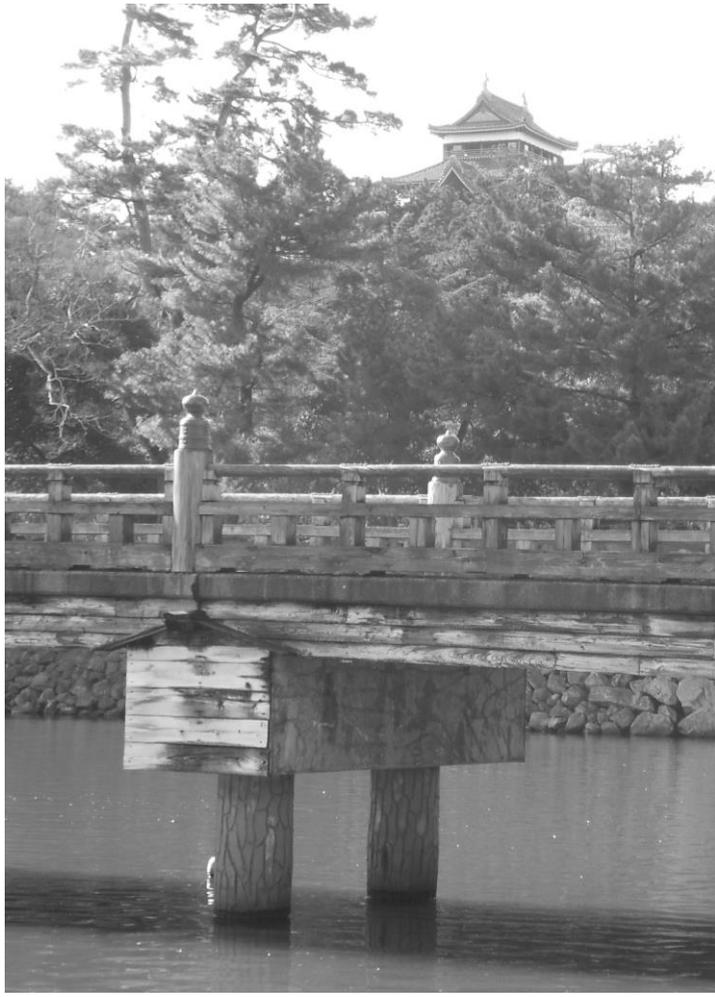
### 新しい政府樹立の転機の年に 元衆議院議員 春名なおあき

参議院選挙の年の幕開けです。「安倍暴走政権を倒し、新しい政府を樹立する大きな転機となす1年に」―決意も新たに新年を迎えました。昨年は、後世に語り継がれる1年でした。憲法を平然と壊す独裁政治の異常さ、醜さが浮きぼりになったこと。一方、主権者が自分の頭で考え、



### 戦争法廃止をみなさんとともに 党鳥取・島根 国政対策委員長

昨年は島根と鳥取を駆け巡る中で、多くの方か



お堀にかかる宇賀橋から松江城の天守を臨む。昨年、築城年を特定する祈禱札の柱跡が見つかり国宝に指定されて来訪者が急増している。(松江市)

どこでも根を張り、住民のいのちとくらしを守って踏ん張っておられる姿です。島根原発、上関原発、低空飛行訓練、岩国基地の強化、中山間地と農林漁業、医療や介護、消費税増税など、切実極まる要求を体いっぱい受け止

### 遠藤ひでかず

「戦争法の強行は本当に許せない」「憲法を無視する安倍政権の独裁政治に、これから日本はどうなっていくのか」など怒りや不安の声が寄せられました。「アベ政治を変えてほしい」という願いが



### 党の大躍進をみんなの力で 衆議院議員 大平 喜信

2014年末の衆議院選挙。11年ぶりの中国ブロック議席奪還にみんな喜びに沸いたあの日から1年が経ちました。平和とくらし、憲法を破壊する安倍政権に対し、中国地方各地から怒りの声があり、空前の規模での運動と連帯が広がりました。そうした運動と心一つに、躍進した32人の国会議員団一丸

めてきました。必ず国政に駆け上がり、この願いを届ける架け橋となつて働きたい。歴史的な選挙をたたかえる喜びと誇り、責任をひしひし感じながらの新年のスタートです。ご一緒に歴史の扉を開こうではありませんか。

山陰両県にも強くあることを実感しています。今、独裁政治を許すかどうかの瀬戸際です。戦争法を廃止し、立憲主義を取り戻す「国民連合政府」が安倍政権に代わる最も現実的な政権構想です。みなさんと力をあわせ、国民連合政府の実現、参議院での日本共産党の躍進に力を尽くします。

となった論戦は安倍政権を激しく追いつめるとともに、野党共闘を前進させ、国民連合政府構想にも確かな展望を与える大きな力となっています。今年、国民連合政府の実現を大きくたぐりよせる勝負の年。まずは夏の参議院選挙で、さらなる日本共産党の大躍進をみんなの力で必ず勝ち取るうではありませんか。私自身その先頭に立つとともに、中国地方の要求実現のためにさらに「アツくやさしく」、元氣いっぱいとりくんでいく決意です。

### 鼓動

海を臨む高台にあるロマネスク様式の教会。厳かな雰囲気の中、参列者には見えない母と息子が、びつたりと寄り添い赤絨毯を歩む。2人はもう永遠に別れることのない幸せをかみしめながら扉の外へと消えてゆく。映画「母と暮らせば」のラストシーンに、何か安らぎを覚えたのはなぜだろうか▼「生涯で一番大事な作品をつくりたい」。山田洋次監督の熱い思いが伝わる、やさしく泣けるファンタジーだ。長崎の7万人ものありふれた日常を瞬間にして無残にも消し去った原爆。母と亡霊となった息子、そして婚約者の女性。3人のふれあいを通して、戦争の残忍さを浮き彫りにする。まさに永遠に語り継がれる、珠玉の感動作だ▼「僕が死んだのは運命」という息子に、「運命なんかじゃなかつた。地震や津波とはちがう。原爆が落とされなければ、あんたは死なんでもよかつた」と、母は唇をかみしめる。山田監督も「戦争が起きた」というけど、戦争は主語になりえない。戦争を起こしたのは人間にほかならない。だから起きずにすますこともできた」と言う▼映画は、生き残った人の苦しみも伝える。同級生が爆死した中、病気で休んで助かった婚約者は、「娘が死んで、ズル休みしたあなたが生きている」と同級生の母親から非難される。同じことは、小紙の「過ぎし日々」の執筆者で、広島原爆の直前に疎開して生き残った西尾幸子さんも経験している。(1217号「鼓動」)▼今年も参院選がある。まさに戦争法廃止への正念場だ。「この映画で70年前に何が起ったのか、未来に向かって何をすべきかを感じてもらえたらとても嬉しい」と主演の吉永小百合さん。その思いをしっかりと胸に刻む頭にした。(吉)